メリカ野牛のことである。

かつてアメリカ大陸には、特に大平原を中心に、五千万から六千万頭のバイソンが群れをなしていた。しかし肉が美味で皮も利用価値が高いため、新大陸に白人がやってきてから盛んに捕獲され、一八八五年までにほとんど絶滅してしまった。

カナダでは一八九三年、残った五百頭を保護する法的措置がとられ、一九二〇年代には北西準州とアルバータ州北部にまたがるウッド・バッファロー国立公園もできた。そして平原に住む六千頭のプレーリー・バッファローを米国からこの公園に移し、より大型のウッド（森林）バッファローと交配させた。その結果、現在ではウッド・バッファロー国立公園に約一万四千頭が昔のように群れをなすほどになった。そのほか、エドモントンの東にあるエルク・アイランド国立公園に六百頭、その他の国立公園にわずかづつだが飼われている。

ジャコウウシ Muskox

カナダ北部とグリーンランドを原産地とするジャコウウシ（麝香牛）は、ひづめまでちぢれた長い毛でおおわれ、なかなか愛嬌のある姿をしているが、その歴史は悲惨だ。

体重約三百キロというジャコウウシは、古い昔から人間の食糧にされてきた。しかし、十九世紀に北極一帯へやってきた捕鯨者や毛皮猟師、探検家たちが毛皮や、自分たちの、あるいは犬の食糧用に乱獲した結果、アラスカでは一八六〇年頃、カナダのハドソン湾南岸では十九世紀末にほぼ絶滅した。北極点に近いエルズミア島でも、一八八〇年から一九一七年の間に千頭が殺されたという。

そこでカナダ政府は一九一七年、餓死を避けるとき以外の捕殺を禁じ、二六年にはクイーン・エリザベス諸島猟獣保護区を設けて国内のジャコウウシを完全な保護下においた。その翌年設定されたテロン猟獣聖域では、現在も一切捕殺が禁じられている（北極の一部地域に住むエスキモーだけは、一定のジャコウウシ猟が認められている）。

こうして保護されたジャコウウシは、その後どんどん増え続け、現在ではアラスカやソ連、そしてカナダ国内のかつての生息地などにも〝移植〟されて、世界全体で約二万頭を数えるほどになった（半分以上はカナダ）。しかし気候の変化（食糧は草や地衣類）や北極の開発による減少も生じており、政府は一九六九年、ジャコウウシを新たに「絶滅の危機に瀕した動物」に指定して、保護を強化している。

天敵はオオカミ。オオカミに攻撃されると、外に向かって円陣をつくり、幼獣を円の中央に集めて防御する。

国立公園

野生動物の天国

カナダには28の国立自然公園がある。その面積は、およそ13万平方キロ。九州を差し引いた日本全体の面積よりやや大きい。そのうち13を選んで、公園に住む動物たちを紹介しよう。

クルアン国立公園

ユーコン準州の南西部に位置するこの公園（約二万二千平方キロ）の半分以上は氷におおわれ、クルアン山脈とカナダの最高峰マウント・ローガンを擁するセント・エリアス山脈が走る。ここは、アメリカヘラジカやシロイワヤギが群れを作っているほか、森林トナカイ（カリブー）、クロクマ、アメリカグマ、オオカミ、コヨーテ、アカギツネ、クズリ、オオヤマネコ、ビーバー、カワウソなどの生息地として知られる。

ナハンニ国立公園

北西準州のサウス・ナハンニ川に沿ったこの地域は、滝あり、渓谷あり、けわしい山岳や温泉のある美しい公園である。ここには、ヘラジカ、ビーバー、森林カリブー、ドールシープなどが生息している。

ヨーホー国立公園

ロッキー山脈のふところに抱かれたヨーホー国立公園では、ヘラジカやオジロジカ、ミュールジカ、ワピチ（鹿の一種）が徘徊し、山壁にはシロイワヤギやナキウサギの姿が見られる。いずれもハイイログマ、クズリ、コヨーテ、テンの獲物である。鳥類は数は多くないが、カモ、シジューカラガン、シママヒワ、ゴジュウカラ、アメリカキクイタダキ、タイランチョウ……と種類は豊富。

カナダハクガン

ジャスパー国立公園

次のバンフ国立公園とともに世界的に有名なこの国立公園では、ハイイログマ、シロイワヤギ、オオツノヒツジ、マーモット、ナキウサギが、ときどきキャンプ場にも現われる。ミュールジカ、ワピチ、ヘラジカ、コヨーテ、テンなども見られ